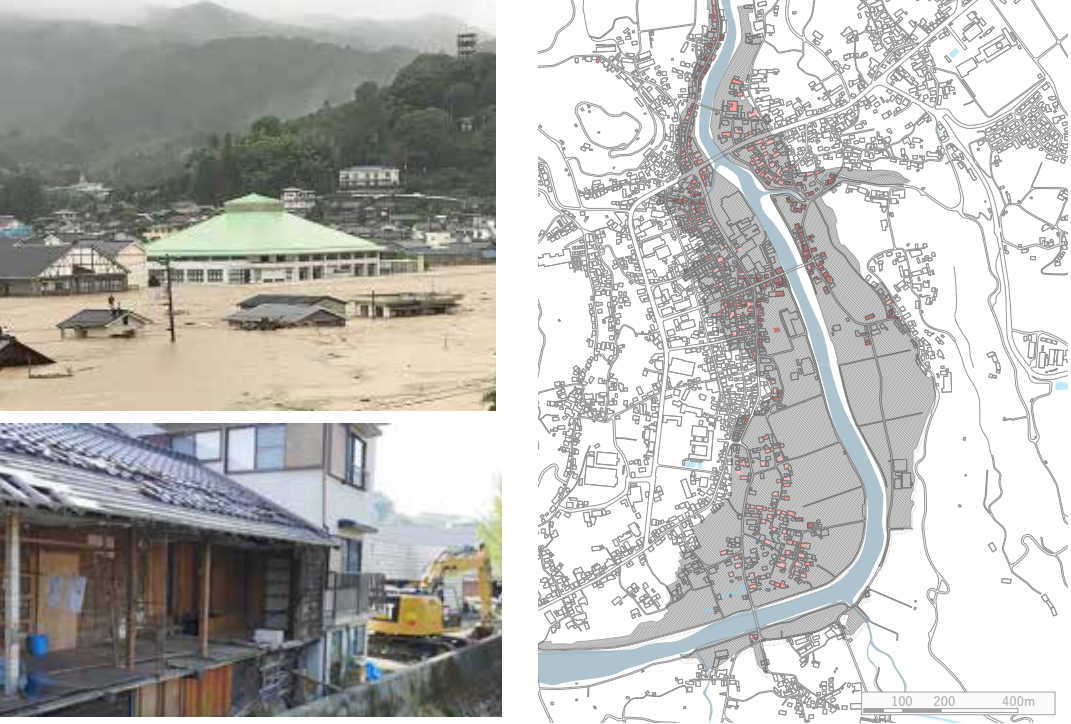


1 SITE

愛媛県西予市 野村町野村
野村ダムの下流に位置する野村町の中心部、野村。この地区は西予市東部の拠点としての役割を担う。地域では昨年の西日本豪雨からの復興が課題となっている。我々は西予市の復興計画を基礎に新たな視点での計画提案を行う。



西日本豪雨における被害
川沿いの公共施設と住宅や倉庫は大きな被害を受けた。今後は川沿いの土地利用を再考する必要がある。
地域内避難の失敗
災害後の調査により、避難途中に洪水に遭遇し避難に失敗した例が多いことが分かった。今後は避難所とそこまでのルートを明確にする必要がある。
川の認識度の低さ
かつては脇川の危険性を住民が十分に認識していたが、野村ダムの建設により危険性の認識が不十分になった。次の災害に備えるため、川への意識を保つ仕組みが必要である。



2 ANALYSIS

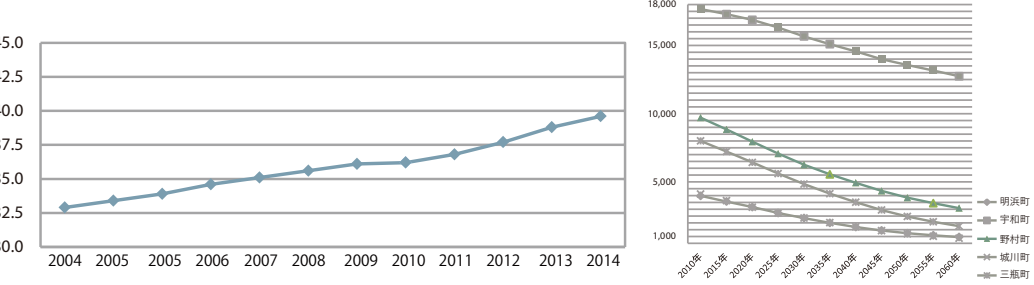


川との距離感
肘川とその支流からの距離と地区の機能より、左の図のように地域を分類した。地区の西側を通るバイパスは川への距離感を増長し、また、まちなかの重要機能は中心部に集積す。この結果、肘川は野村の中でのシンボリックな存在である一方、日常生活では意識しにくい構造になっている。
まちなかへのアクセス
住民の生活のための交通手段は車が多い。そのため、今後高齢化が進行した際には新たな交通手段を考える必要がある。また、まちなかでの交通手段も十分に確保されておらず、調査時には地区内に人が少なく、活気が少ないと感じられた。

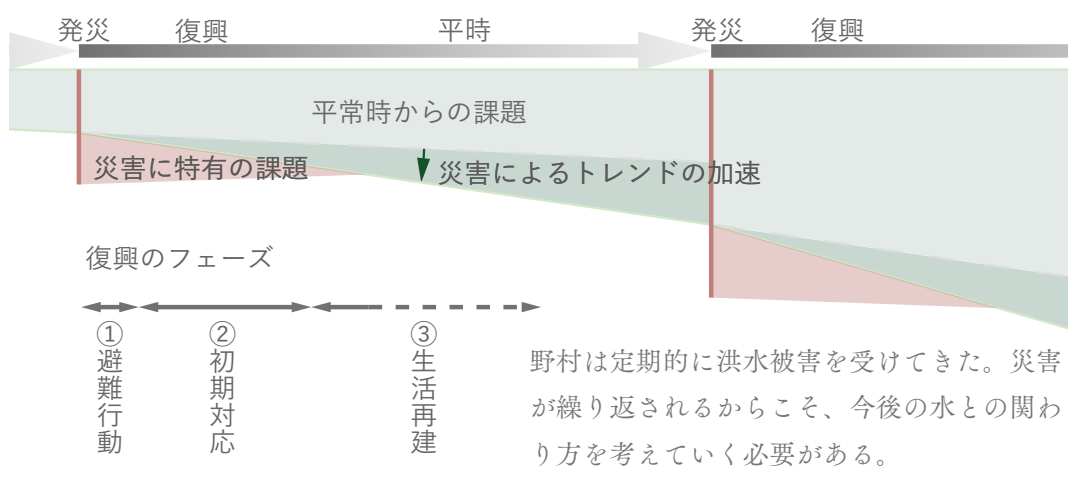


人口減少と高齢化

これまで高齢化率は年々上昇しており、まちの人口の多くを占める高齢者が暮らしやすいまちづくりを行っていく必要がある。また、2060 年ごろには現在の半分近くまで人口が減ることが予測されている。



災害のサイクルと復興計画



3 CONCEPT



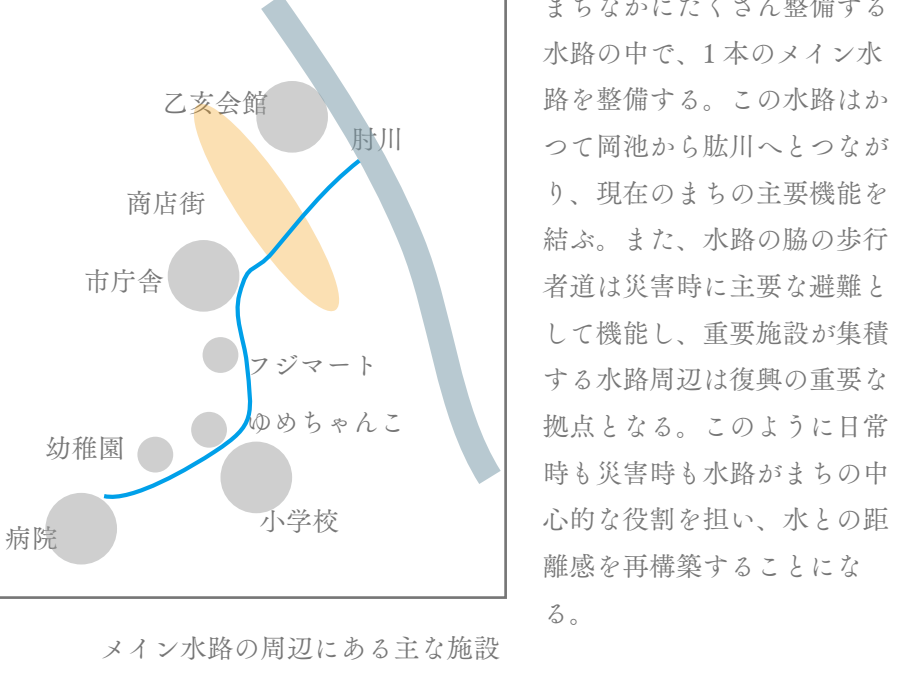
4 PROGRAM ①水路の再整備



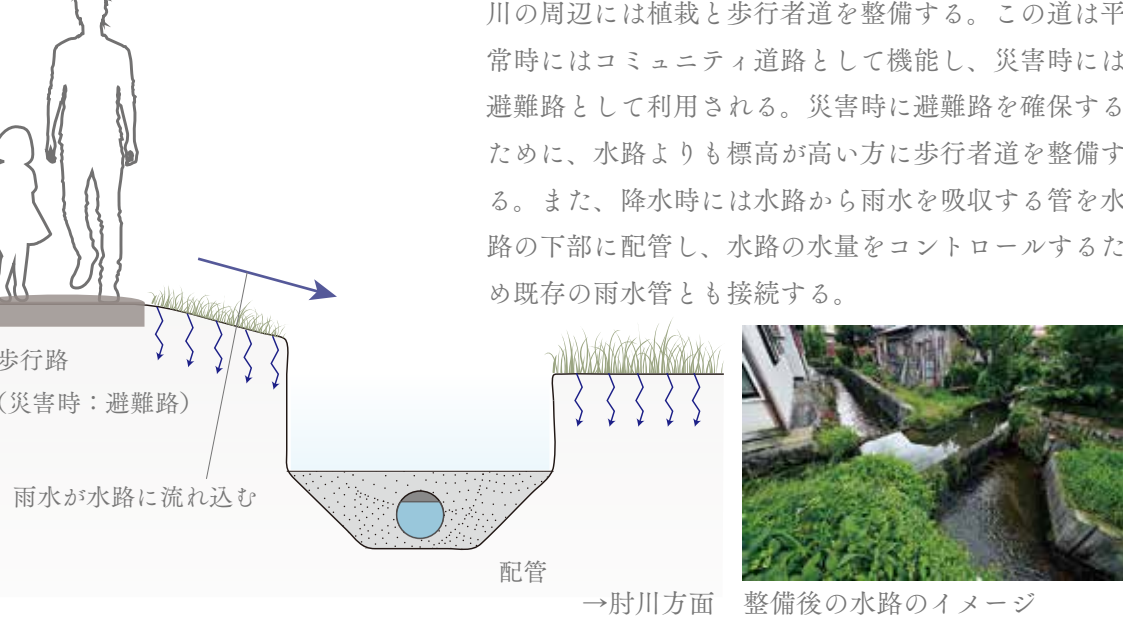
PROGRAM



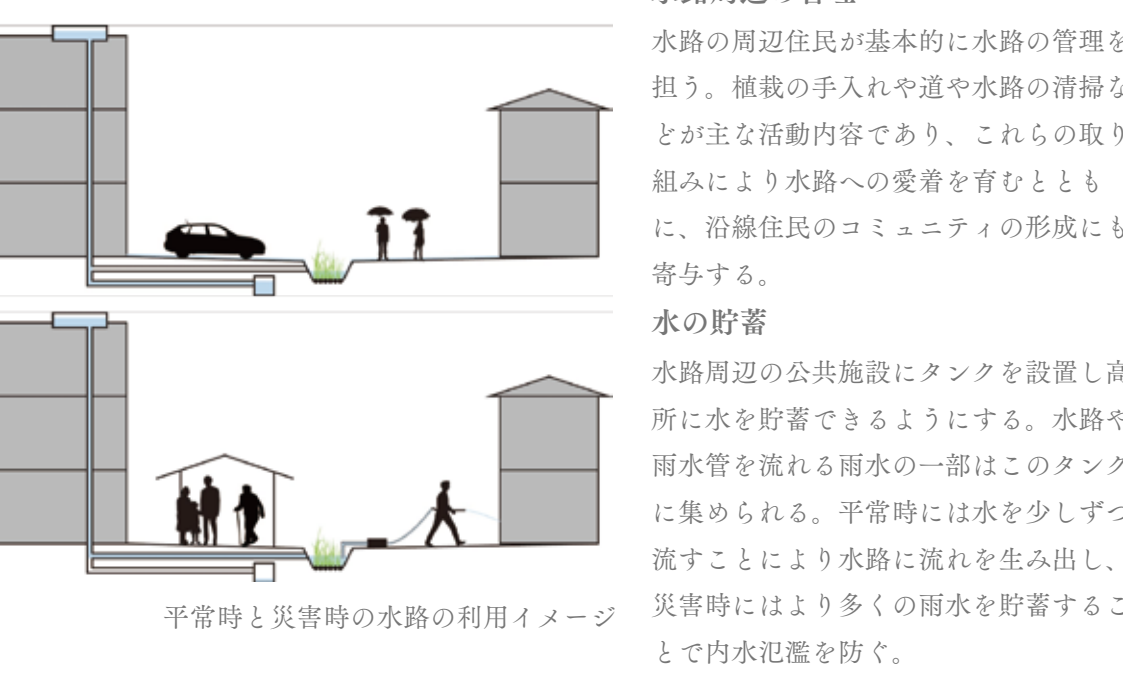
3 メイン水路の整備



2 水路の整備計画イメージ

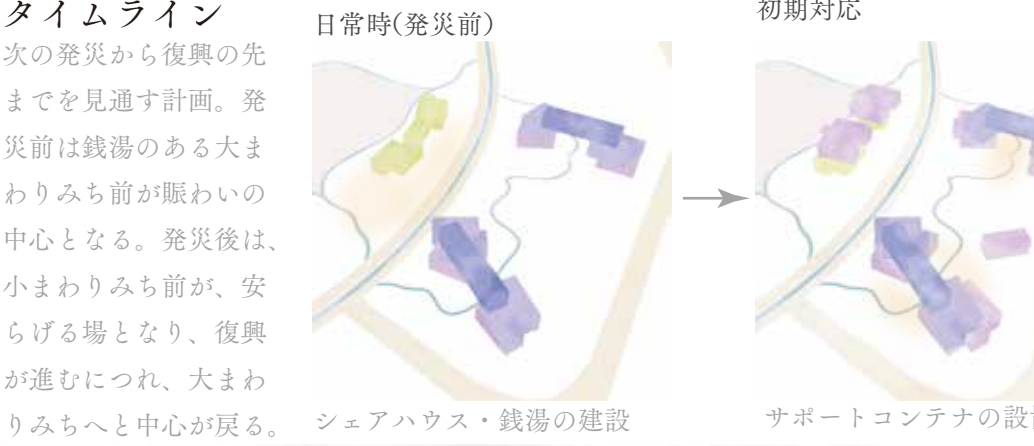


4 水路の管理方法



遠まわり

集住エリア ～シェアハウスにおける水路の活用～

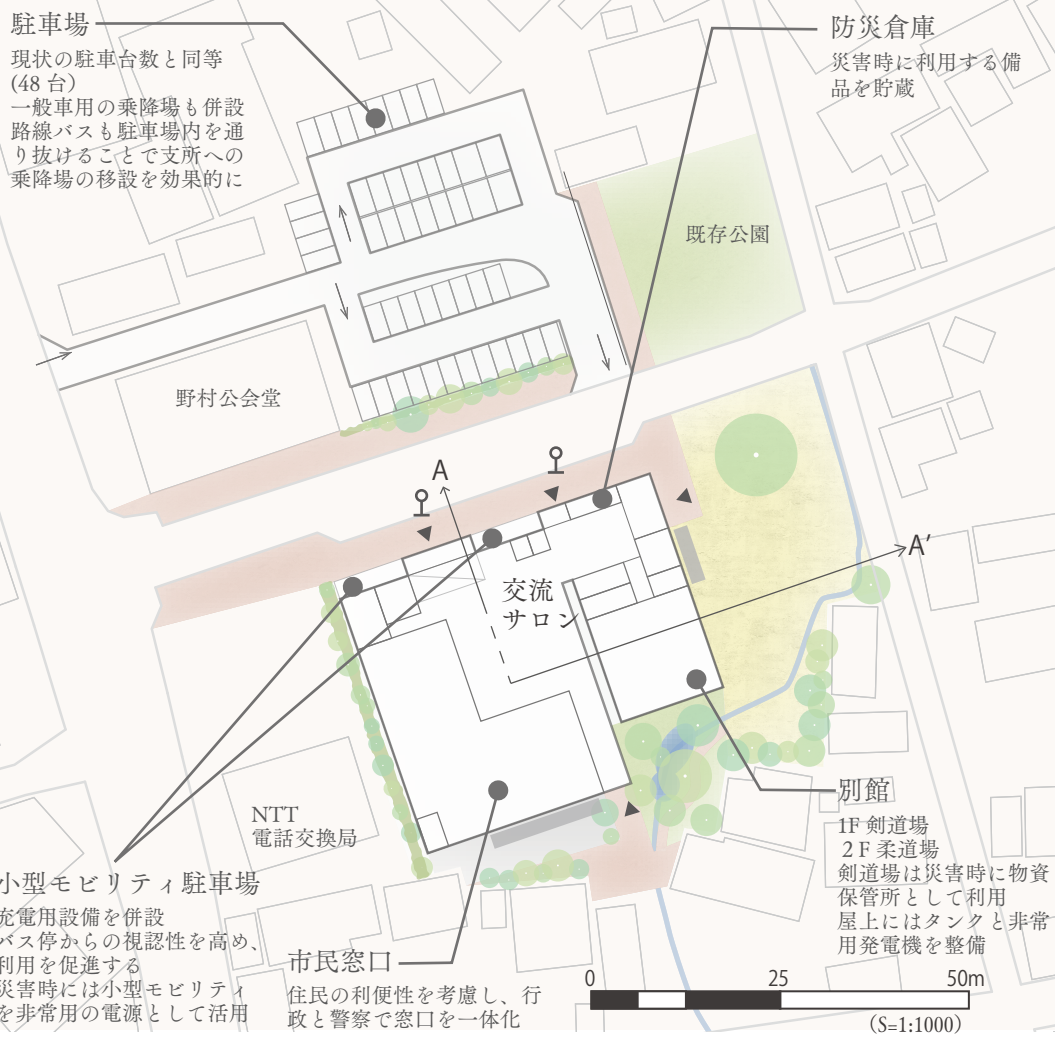


復興時

コンテナを利用した住居・サービス施設

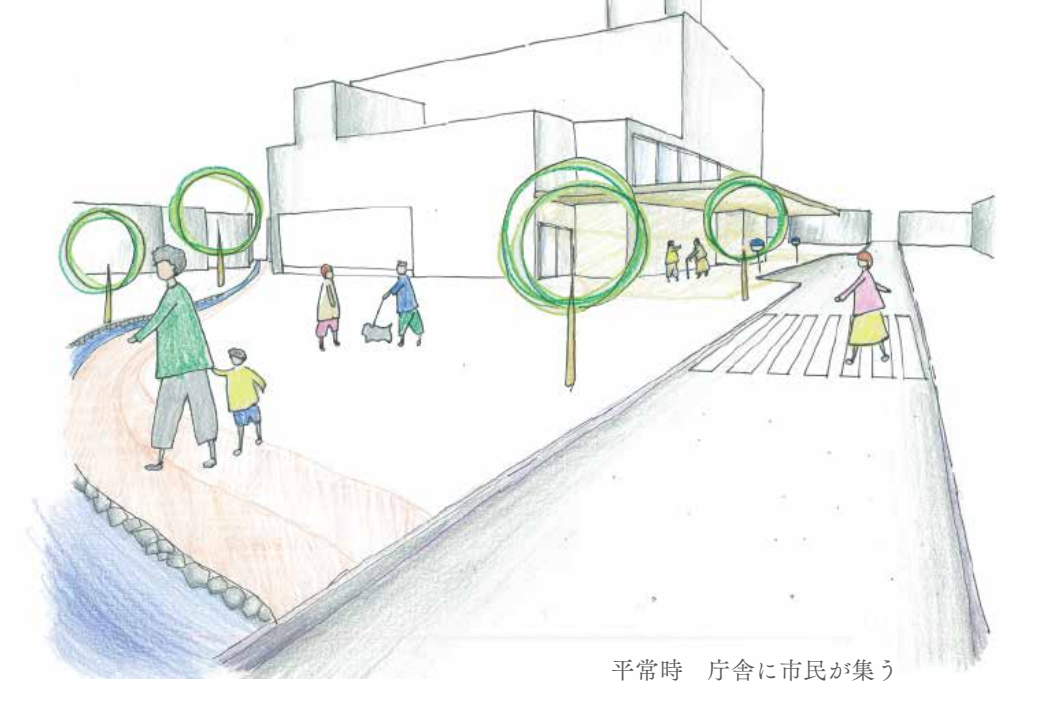
構造性・施工性の高いコンテナを施設の構造として用いた計画を立てている。このコンテナを再配置することによって、必要に応じて少しずつ形や機能を変えることができる。平常時から復興期までのボリュームの変遷として上部イメージ図のものを想定している。
平常時には、人が集まる主な場所は水路周辺となり、銭湯や足湯、水辺空間が周辺住民や水路沿いの道を歩く人々を惹きつける空間となっている。また、施設の一階部分が住民たちの集う場所として利用される。
災害発生直後、避難をする際には施設に住む高齢者や障害者など避難の難しい人がシェアハウスの他の住民と避難をすることができ、逃げ遅れが生じないことを想定している。
さらに、災害発生後の初期対応の段階では、隣接する、避難所である小学校の拡張機能を持った施設として利用される。避難所では生活環境の悪さが問題視されるなか、人々の憩いの場として、また、コミュニティの場として機能することにより住民を支える。
生活再建時には、必要に応じてコンテナの追加や再配置をする。これらは仮設住宅としても、災害公営住宅としても利用可能である。利用方法の一つの例をあげる。まず、1 階を野村小学校に避難する人々の憩いの場として開放し、それ以外のコンテナには小さい子どもを連れた家族や、お年寄りなど、それぞれのニーズに合わせたコンテナを設置する。次に、上層部には 10 年以上住める仮設住宅を設置し、病人や、希望者から入居させる。このようにしてゾーニングをしながら、優先度の高い人から順番に入居することにより、円滑な復興が可能になる。

支庁舎エリア ～市民に開かれた新野村支所と防災拠点～



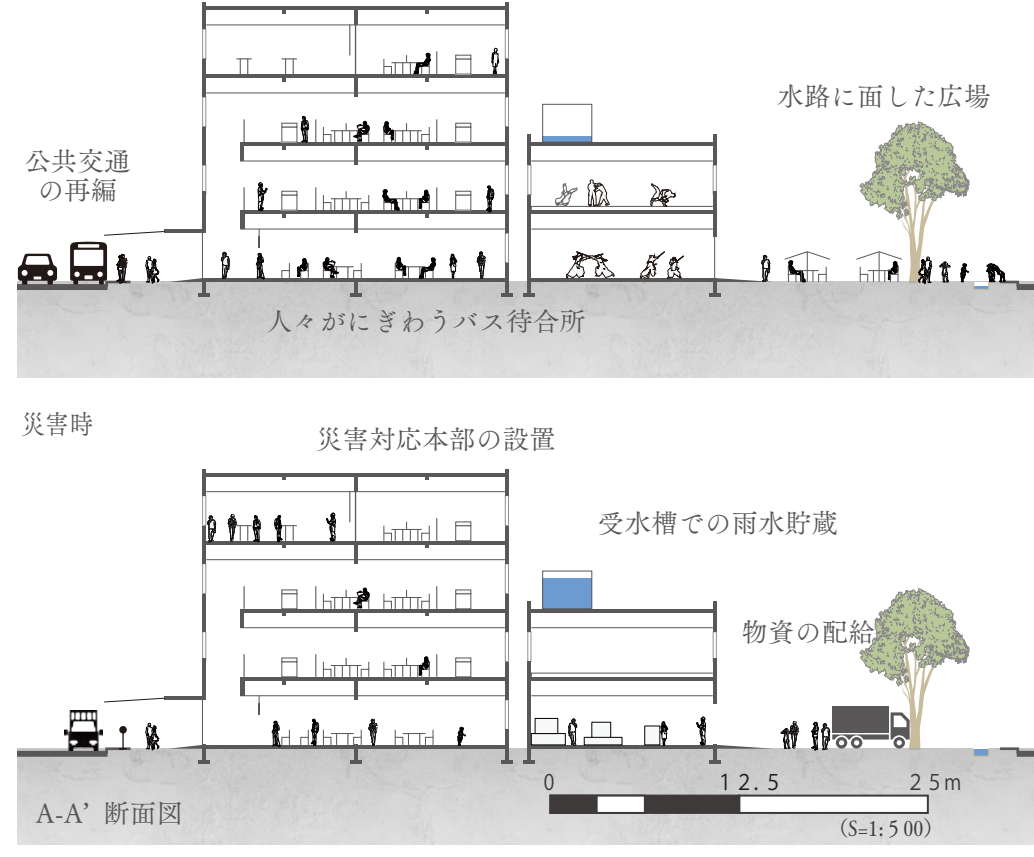
来るべき災害に備える災害対応拠点

野村では今後も水害の発生が想定され、新庁舎の計画においては災害対応の拠点としての機能も求められる。
野村地区は市庁舎のある字から離れており、災害時には一定期間の孤立が想定される。これらの事態に対応するため新野村支所への現地災害対応本部の設営を想定し、防災センターを整備する。新野村支所には行政庁舎と警察が同居しており、従来よりも素早い情報共有や協力の推進が期待され、防災センターの整備と合わせてより円滑な災害対応が可能になることが期待される。
災害時の庁舎の機能停止を防ぐため、別館の屋上に 72 時間分の非常用発電装置と水路と接続する受水槽を整備し、災害時の電源及び中水の確保を図る。受水槽は大雨の際には水路の水量をコントロールし、災害時の断水の際には下流域に中水を提供し、泥かきなどの活用する。(同様の設備を野村病院でも整備)
別館 1 階の創造場は災害時には物資の保管所として活用することを想定し、災害時には東側を大きく開口し、円滑な支拂物資を搬入と広場との一体的な活用の可能にする。また、小型モビリティは電源として活用し、携帯電話などの充電を行うことができるようにする。このように行政や警察だけでなく、広場を中心に市民に支拂物資や電気を提供し、あらゆる人々に対する防災拠点として円滑な復興に寄与することが期待される。



人々がにぎわう新時代の開かれた庁舎づくり

西予市では耐震性に問題を抱える野村支所の移転改築を計画している。この建て替えでは市民に開かれた新時代の庁舎を目指すとともに、来るべき災害の際には防災拠点として活用し、被災後の円滑な復興につなげる。
新支所は既存の野村支所と野村警察署を統合し建設する計画となっている。新支所では主要な機能を担う 4 階建ての本館と柔剣道場を中心とする 2 階建ての別館に分ける。市民への窓口は本館の 1 階に集中させセキュリティ管理を容易にし、休日にも本館 1 階及び別館を開放し、市民が集う開かれた庁舎を目指す。
将来的な人口減少と周辺の公共的性格を持つ建築の老朽化を踏まえ、本館では行政機能が縮小した際には周辺の業務機能を受け入れられるよう、将来的な改修も想定し、フレキシブルなフロア配置を実現する。
庁舎のエントランスとなる東側には水路に合わせて広場の整備を行い、地域のイベントや活動の場として活用し庁舎と水路・まちをつなげる。
現在バイパス沿いにある野村停留所を支所前に移設し、小型モビリティの拠点を併設することで交通拠点としての機能を強化する。交通システムの整備と合わせてバスと小型モビリティとのシームレスな乗り換えを可能にし、バスの待ち時間を過ごすことのできる交流サロンも整備することで周辺住民の公共交通の利便性を高め公共交通への転換を図り、サステイナブルな暮らしを実現する。
駐車場にはバイパスからアクセスすることで、中央通りの交通量を減少させ、歩行者にとってより良い空間になるように努める。



2居場所づくり

1 まちなかの重要施設

メイン水路の周りに立地する施設は行政機能や医療機能を担う市民の生活に不可欠な重要な施設であり、多くの人が何らかの目的を持ちこれらの施設を訪れる。この重要施設において住民の居場所となるようなスペースを整備することで、施設の魅力を高め、野村地域全域から広く人々を集める。



新・公営住宅



市庁舎



商店街



公園

2 地区内のコミュニティ施設

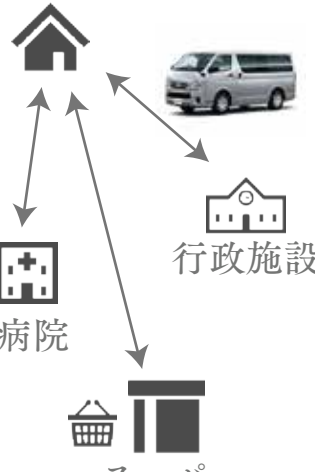
左の地図のように野村には町会ごとに集会所が存在している。この集会所を地区内のコミュニティの拠点と位置付け、多世代交流を促進する。この施設では、地域住民が相互にサポートして生活を支えるような仕組みが整うことを想定している。具体的な利用イメージとしては、買い物代行や家事サポート、子供の見守りなどである。また、不定期で地区の行事を行ったりすることもあるうえ、複数地区で連携してお祭りを行うなどということもできる。



3新しい交通システムの導入

現在のシステム

目的地と自宅を車で行き来する



新しいシステム

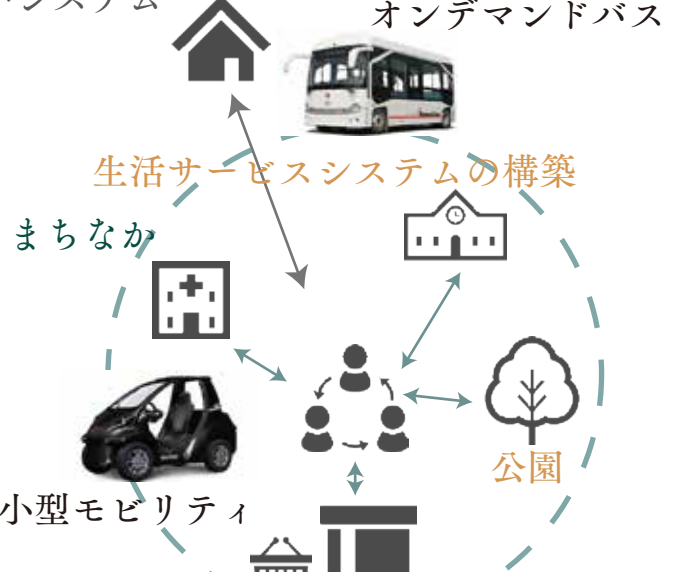
オンデマンドバス

生活サービスシステムの構築

まちなか

小型モビリティ

公園



5 PERSPECTIVE

物質としての水路 = 水 + 町の中心に連続性

の持つ効果と役割

を作り出す

	平常時	避難時	初期対応	生活再建
水	癒しの空間、管理の対象 コミュニティ形成の場	水路を通した安全確認	泥を洗い流すための水資源 避難所生活のQOLの向上	水を中心に新たな コミュニティ形成を促進する
連続性	交通システムと合わせた コンパクトシティの実現	避難路の認知度の向上 避難路としての利用	重要施設を結ぶため、 ボランティアの人への目印	復興のシンボル



水路を中心に子供が集まる



水路の水を利用した復旧作業

6 PLAN



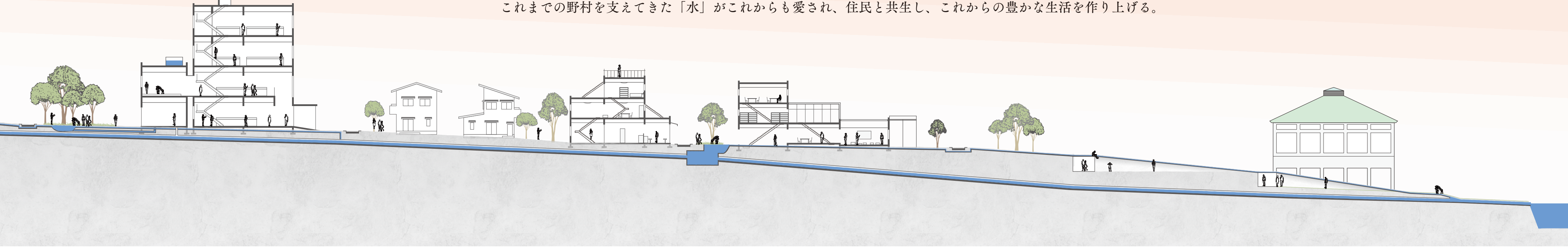
小型モビリティにおける将来的な自動運転の導入
自動運転の実用化に向けては自動車だけでなく、インフラ間の整備も重要となる。まちなかにより人が集まることで公共投資を誘発しインフラの自動運転への対応を進めることにより、レベル4の自動運転をまちなかに導入する。

サステイナブルな暮らしへの展開
公共交通の利用を促進することにより、二酸化炭素の排出量を削減し、サステイナブルな暮らしを実現する。

災害時の小型モビリティの活用
災害発生時に小型モビリティは避難困難者などの高齢者の避難の手段となる。事前に車での避難が必要となる人を確認することで円滑な避難が可能になる。また、自動運転が導入されれば、より迅速に避難が可能である。また、災害後にも小型モビリティが電源とも電気エネルギーを供給することや携帯電話などを活用できるようにする。

小規模モビリティの活用想定範囲
バスケットコート
乙亥会館周辺には様々なスポーツ施設が設けられる。
ランニングコース
右岸に設けられた東屋。まちなかから少し離れた右岸の住民が立ち寄る。
左岸と右岸を繋ぐ飛び石。
市庁舎エリア
商店街エリア
集住エリア
フジマート
野村出張所バス停を新野村支所前に移設
新しく建設される保育園、保育園の庭にも水路を引き込み、庭で子供が水遊びを楽しむ。
野村保育園
野村小学校
ゆめちゃんこ
ゆめちゃんこの周りにも水路と緑地が整備され、子供たちの憩いの場となる。小学校と一体的に利用される。
病院の前の庭まで引き込まれた水路の周りには緑地が整備され、患者たちの憩いの場となる。
愛宕山公園
三嶋神社
コミュニティ農園
75
150m
(S=13000)

するまち



商店街エリア ～商店街における空地の活用と避難路への意識～



Site 1:500

“まちなかの居場所”と日常利用による地形の認識

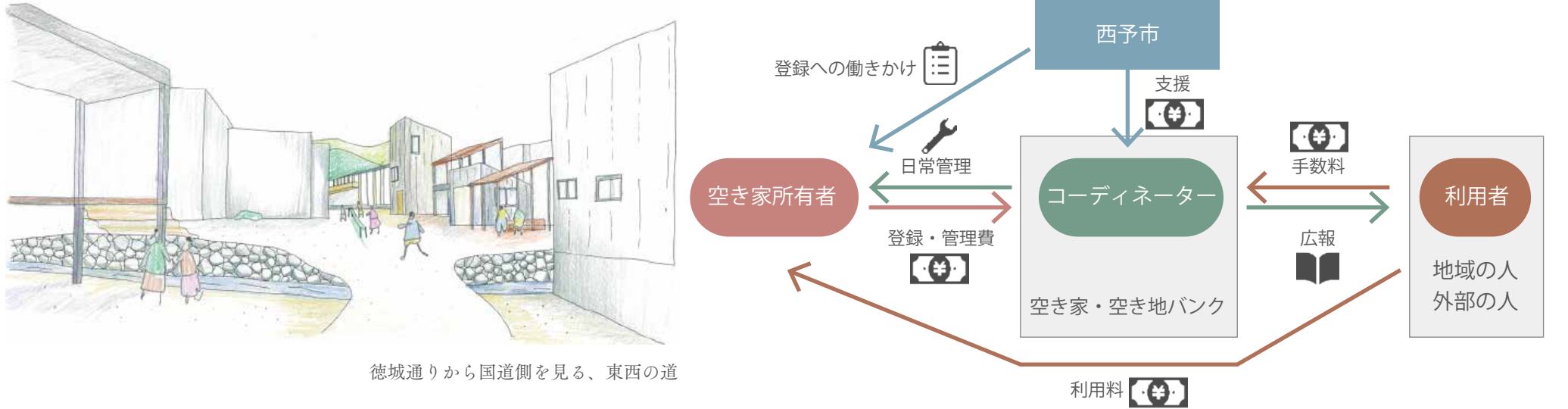
商店街は“まちなか”に位置するが、空き家・空き地の問題や、高校生など若い世代の居場所がなく、訪れる人が少ないという問題がある。そこでここでは、川との距離感の構築、災害の避難の意識付けに加えて“まちなかの居場所”をテーマとした。空き地には地位拠点となる空間を設ける。東西に連なる大小のイエを配置し、それぞれのイエは、商店街で暮らす人や高校生など、それぞれの活動に合わせた継続的・一時的な居場所となったり、それらの活動の支援や管理を行うコーディネーターのための場所となる。そしてこの場所は、日常的なコミュニティ拠点として利用されるだけではなく、避難路となる東西方向への抜けを意識させ、日常的にGLの高い山の方への道を知る場となる。また、イベント時には川辺の公園からまちなかまでを繋ぐ拠点として機能する。日常的に住民が利用する場所が、東西方向への道の抜けを意識させる役割を担うことで、避難の際に向かうべき方向が直感的にわかるといった意識付けを期待する。

水路への操作:「水の流れ」を捉え「繋がり」を認識する

東西南北の道、緑道という三方向の道の結節点において、水路の一部開渠化し、まちなかへ水を引き込む。流れの先を捉え、その変化を感じることで、地形を認識する。地域拠点による東西への道の抜けの認識と合わせて、川からバイパス側の山までの繋がりを認識し、川との距離感を構築する。

空き家の活用に向けた展開

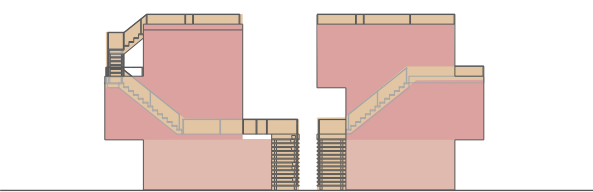
コーディネーターを介して空き家所有者と利用者を繋げることで、空き家・空き地の活用を促進する。住居として日常的に利用される他にも、祭事の際の短期的な利用やまちづくりワークショップでの実験的な利用が想定され、利用されない時期もコーディネーターによる維持管理により施設を維持する。



登録への働きかけ
日常管理
登録・管理費
空家家所有者
西予市
支援
コーディネーター
空家家・空地バンク
手数料
利用者
地域の人
外部の人
利用料

階段から賑わいと逃げ道を叶える住まい

次に、商店街に新しく移住する人のための住まいを提案する。3階建ての外周を階段が包み込み、平常時は一階部分の店と、2階以上の家が階段によって混ざりあり、商店街の通りへと生活があふれ出す。また、お隣さんとの接する場を階段で構築することで普段から隣の人との声掛けを手助けする。災害時には避難所へあらかじめ避難することが前提ではあるが、階段を上することで緊急避難が可能になる。





平常時 暮らしが道にあふれ出す



災害発生時 緊急の逃げ道

肱川エリア ～空地となった川辺空間の再整備～

被災地と災害の記憶の継承

野村沿いのこのエリアは西日本豪雨の際に深刻な被害を受けた。古くからこの地にあった酒蔵は廃業し、住民も住宅を失い空地が増加している。古くから災害と向き合ってきた野村では次世代に向けて災害の記憶を継承していくことが求められるが、このような甚大な被害を受けた地域にこそ将来に向けて地域や災害の記憶を継承していく場を整備していくことが求められている。



川辺という地域資源の活用

野村は、両側を高い堤防に囲まれ、人知れず川底の低い部分を流れる。建物も川へと背を向けるように立ち並び、豊かな自然にも関わらず川辺を訪れる人は少ない。かつては川との関係性の中で生活が営まれていた野村において、川辺の再生を通じて人々と川との距離を再び近づけることで水を中心としたまちづくりを進めることができる。

右岸三島町との接点をふやす

川付近まで住宅や店舗が並ぶ右岸の三島町では、4軒を除く、多くの建物が甚大な被害を受け解体された。残存する住民が散歩のついでに東屋を通じて川辺に立ち寄りたり、木製橋を通り水面に近づくことができる。

徳城通りから川までをなだらかに結ぶ

水害対策としてのカミソリ堤防は、川へのアクセスを妨げるのみならず、人々の川への理解を妨げている。カミソリ堤防を切り崩し、徳城通りから川までをなだらかに結ぶ土地改変により、一人一人が川を意識した豊かな安全な生活を営むことができる。

乙亥会館から連続した運動公園

相模競技会場であった乙亥会館は、被災した野村体育館の機能を引き継ぎ、シャワー室を完備する体育施設に変更された。乙亥会館から運動公園を結ぶランニングコースを通り、用具をレンタルして屋外でのゲートボールや、フットサルなど楽しめる。

高低差を利用しただんだん畑

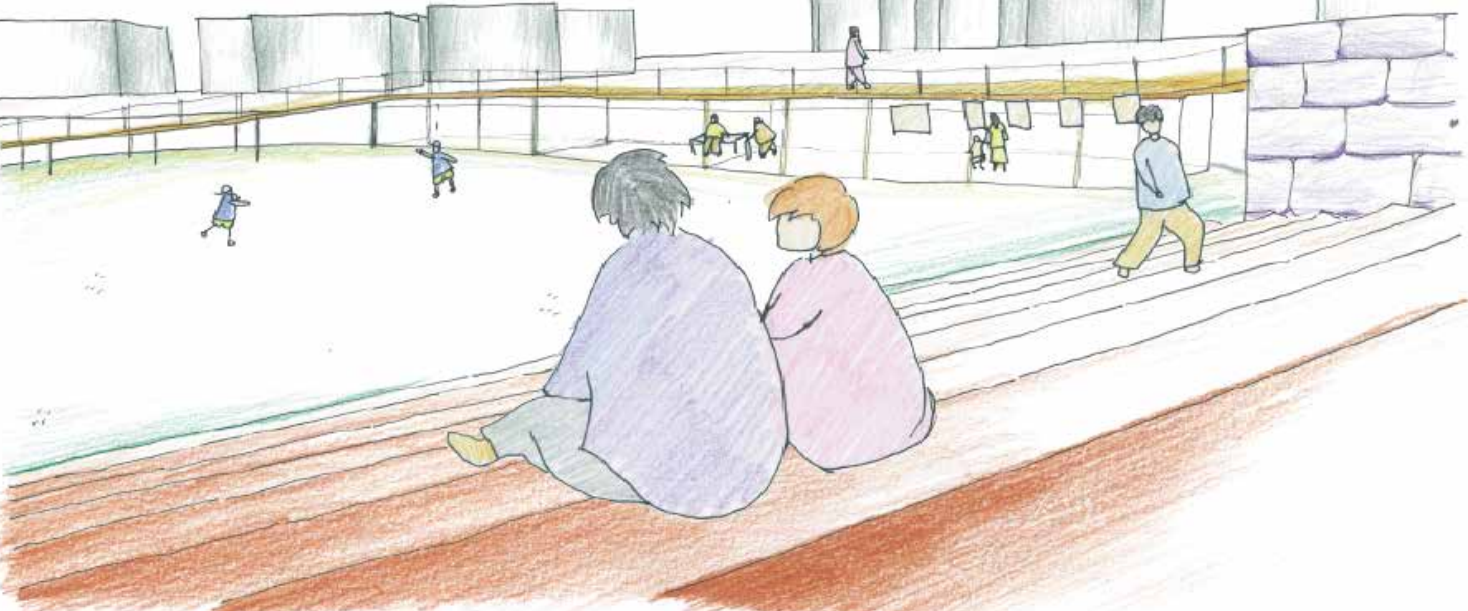
道路と芝の丘の間には3mもの高低差が存在する。この段差を利用してまちに開かれた段々畑とする。コミュニティ農園を運営するNPO法人を管理人として、住民が気軽に参加し談笑できる畑として川辺空間を更に魅力的にする。

自然地形と産業遺産を生かした展望カフェ

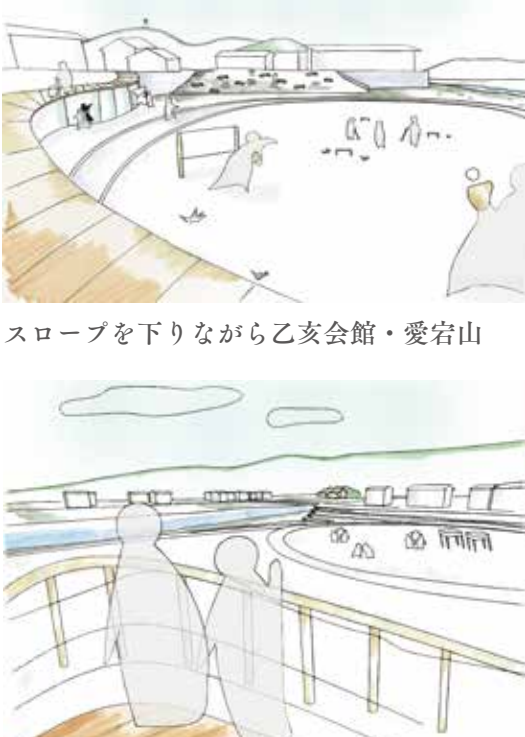
260年の老舗である緒方酒造が、今回の豪雨で甚大な被害を受け倒壊となり、伝統ある酒蔵が解体され、川辺一帯に空き地が広がる。緒方酒造の井戸水を用いてみかんジュースの販売を行い、右岸の三嶋神社までを見渡す展望スポットとなっている。

歴史を継承するギャラリー付き息抜き空間

今回の水害の被害を忘れないという思いから乙亥会館で写真展が開催された。日頃の運動の合間に、川を眺めながら、水害の写真を見て記憶に浸る息抜き空間。ダムマラソンに遠方から訪れる人にも被害を伝えることで、今後の災害で助け合うネットワークを作る。



大階段からギャラリーを望む



展望カフェから右岸の三嶋神社まで見通す